

日本におけるサービス・ラーニングの展開 (6) ——部活動連携型の奉仕体験活動が及ぼす影響——

大東 貢生^{*1} 富川 拓^{*2}
古川 秀夫^{*3} 山田 一隆^{*4}

Development of service learning in Japan Part 6 : The influence of service activities linked with extra-curricular activities

Takao OTSUKA^{*1}, Taku TOMIKAWA^{*2},
Hideo FURUKAWA^{*3}, Kazutaka YAMADA^{*4}

We examined high school students have taken a service learning. And we analyzed changes in the image of volunteer activities they think.

It is as follows : a result of the three surveys in the Tokyo Metropolitan High School.

①By the service learning of required subjects, students change the image of volunteer activities. However, they don't want volunteer activities by service learning.

②They improve the image of volunteer activities by prior-learning and post-learning, rather than actual service activities which they performed.

③After having taken a service-learning, they volunteer performed activities. However, they don't change the image of volunteer activities.

キーワード：サービス・ラーニング，必修科目，中等教育，高校生，ボランティア

1. 問題の所在

この小論の目的は、ボランティア活動に対するイメージの変化についてサービス・ラーニングを受講した高校生に対する調査から分析し、ボランティア活動に参加する要因について考察することにある。

1995年の阪神・淡路大震災でのボランティア活動に対する注目以降、ボランティア活動をめぐる状況には「ボランティア活動をする行為者」「ボランティア団体」「行政」それぞれの関係において劇的な変化がもたらされた。それは、各種統計でのボランティア活動をしてみたい人々の増加、NPO法の制定（1998年）、文部科学省・中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（2002年）、行政や学校団体によるボランティアセンターの設立などに現れている（大東貢生ほか2004：146）。さらに2011年の東日本大震災でも市民によるボランティア活動が活発に行われており、現在でも震災被災者に対する行政組織と連携し行政では対応できないサポ

*1 佛教大学社会学部准教授

*2 聖泉大学人間学部准教授

*3 龍谷大学国際文化学部教授

*4 立命館大学 BKC 地域連携課

ートをボランティア団体が行っている。

これまでサポートについては、自分自身あるいは私的親族間サポートである「自助」、地域社会でのサポートである「共助」、行政機関によるサポートである「公助」が言われてきた。しかし、伝統的な家族や地域社会の崩壊に伴い、個人の自己責任と行政機関による「公助」に過重な負担がかかるようになり、新しい「共助」の形としてボランティア活動などの自発的な市民活動に期待がかかっている。

ところで、この論文で取り上げるサービス・ラーニングとは、地域社会のニーズに応じた社会貢献活動に学習者が実際に参加・参画することで、地域社会に対する責任感等を養う教育方法である（立石宏昭 2005:74）。ここでのサービスとはソーシャル・サービス、社会貢献活動におけるサービスをさす。ボランティア活動はボランティアを行う側からの一方的なサービス提供であるが、サービス・ラーニングはサービスを行うことを通じてサービスを提供する側も何かを学ぶ（ラーニング）という教育手法である（富川拓ほか 2008:9）。文部科学省・中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012 年）で大学でのサービス・ラーニングの可能性が言及されているように、サービス・ラーニングは教育機関と社会の連携の方策として、重要な位置を占めていると考えられる¹⁾。

特に、この小論で事例とする東京都立高等学校（以下都立高校）の教科「奉仕」は、2002 年の文部科学省の答申を受けて東京都教育委員会が平成 16 年（2004 年）4 月に公表した「東京都教育ビジョン」の提言を受け、平成 17 年（2005 年）度の重点事業として「奉仕体験活動の必修化」が位置付けられ、平成 19 年（2007 年）度からすべての都立高等学校で東京都設定教科・科目「奉仕」を必修化したものである（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 2006:i, 富川ほか 2009）。

これまでサービス・ラーニングとボランティア活動の関連性については山田明（2008）などの研究がある。しかし、展開されているサービス・ラーニングは選択科目であり、もともとボランティア活動に親和性を持つ受講生が履修していることが想定される。他方、都立高校の教科「奉仕」は必修科目であり、これまでボランティア活動に親和性を持っていなかった生徒も受講していることが大きな特徴である。したがって、都立高校の教科「奉仕」受講生のボランティア活動イメージの変化を分析することで、どのような要因がボランティア活動の活性化に結びついているのか、必修科目となっているサービス・ラーニングがその後のボランティア活動の促進につながるのかについて、考察を行うこととしたい²⁾。

2. 調査の概要

東京都立 C 高等学校（以下 C 高校）において「奉仕」活動の事前と見込まれる 2011 年 7 月（事前調査）と、事後と見込まれる同年 12 月（事後①調査）及び、「奉仕」活動実施一年後の 2013 年 2 月（事後②調査）に、担当教諭等が、質問紙をホームルームなどで受講生に配布し回収する方法で実施した。このため本調査は全数調査である。有効回収数は、事前調査 180 票、事後①調査 194 票、事後②調査 187 票である。回答数の増減はホームルームなどの欠席者による。また本調査は受講生のプライバシーを勘案しパネル調査ではない。結果は SPSS 19.0 J で分析を行った。

C 高校は東京近郊にある歴史のある学校である。教科「奉仕」の科目名は「社会貢献」。履修学年は 1 年次である。教科「奉仕」導入以前に学校設定教科の科目として「ボランティア」があり、

平成 17 年 (2005 年) 度に教科「奉仕」実践校として応募。学校全体の雰囲気として学校外に向かって開かれた学校である。教科「奉仕」は事前学習 11 時間、奉仕体験活動 18 時間、事後学習 6 時間の計 35 時間で 1 単位となっている。開講時間は土曜日の 3・4 時間目である。また、教科「奉仕」の運営は開講年次である一年生の担任団を中心になされている。奉仕体験活動の受け入れ先は部活動単位で開拓されており、奉仕体験活動も部活動単位で行われていることが多い。したがって C 高校の教科「奉仕」の特徴は「部活動連携型」と考えられる。奉仕体験活動先は保育・学校施設、高齢者施設、地域の夏祭り、通学路清掃・公園整備などである。事前学習や事後学習は担任団を通じ綿密に運営されており、事後学習終了時には受け入れ団体も参加した成果報告会が実施され、受講生が作成したスライドによる口頭発表を行っている (大東ほか 2010)。

3. 結果と考察

3.1. ボランティア活動イメージの単純集計

ボランティア活動について受講生がどうとらえているのかについて、事前調査、事後①調査、事後②調査の 3 回にわたって受講生に同一の質問を行った。質問は Reeb, Roger N et al. (1998) のサービス・ラーニングの調査項目に我々が行ったこれまでの調査に基づき変更を加え³⁾、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」「活動を通じて正しい社会の実現に役立つことができる」「活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる」「活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる」「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」という活動の中で自己の能力を発揮できるかというソーシャル・スキルの項目群、「活動を通じて、地域社会をよくすることができる」「活動を行うことによって、平等な社会をつくりだせる」「ボランティア活動を行っても、社会はそのままである」というボランティア活動の可能性の項目群、そして「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う」という今後のボランティア活動参加への可能性の項目の 10 項目を考案した。また選択肢は「非常にそうだ」「かなりそうだ」「ややそうだ」「やや違う」「かなり違う」「非常に違う」の 6 点法とした。最高点は 6 点、最低点は 1 点、平均点は 3.5 点である。調査回ごとの質問の平均値は表 1 の通りである。また図 1 では質問ごとの平均値をグラフにした。

事前調査、事後①調査、事後②調査を通じて各項目の平均値の推移は同じような傾向となった。「活動の中でちゃんと役立つことができる」「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができ

表 1 ボランティア活動のイメージ (加重平均)

	調査回		
	事前	事後①	事後②
活動の中でちゃんと役立つことができる	4.48	4.61	4.77
自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる	4.36	4.43	4.58
活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる	4.22	4.29	4.30
活動を通じて、地域社会をよくすることができる	4.35	4.42	4.46
活動を行っても、社会はそのままである	3.70	3.86	3.84
活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる	4.34	4.43	4.48
活動を行うことによって、平等な社会をつくりだせる	3.65	3.47	3.48
活動を通じて、自分の問題を解決することができる	3.79	3.65	3.68
活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる	4.51	4.59	4.77
今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う	3.55	3.53	3.49

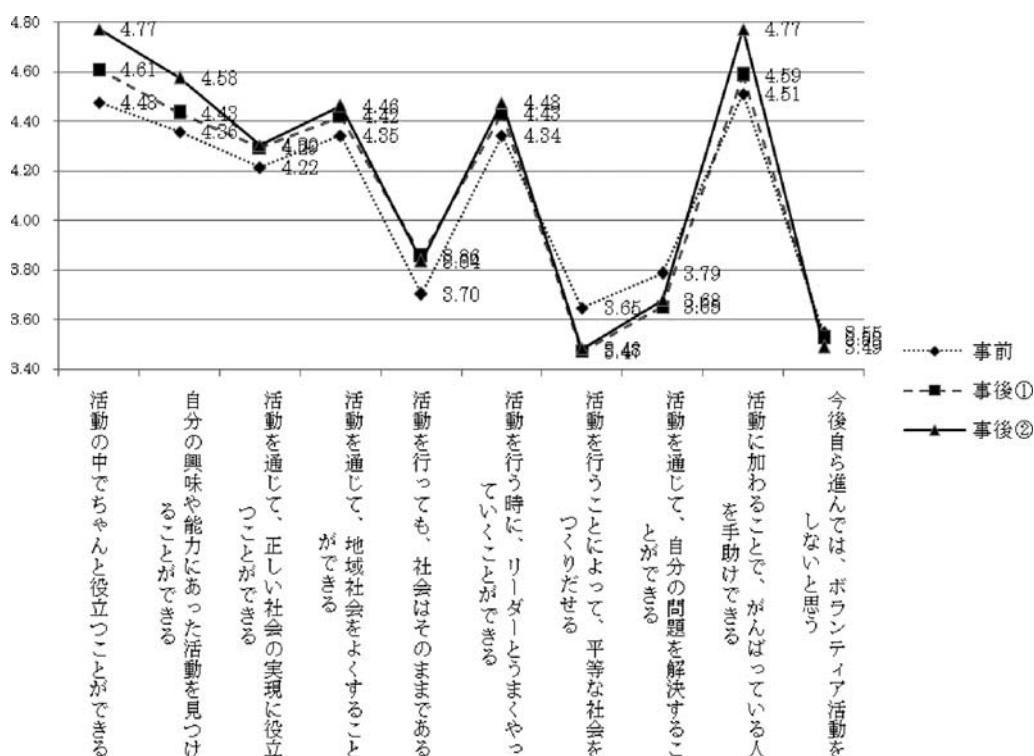


図1 ボランティア活動イメージ (加重平均)

る」「活動を行う時に、リーダーとうまくやることができる」「活動を通じて正しい社会の実現に役立つことができる」「活動を通じて、地域社会をよくすることができる」は平均値4点以上であり、「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」「活動を行っても、社会はそのままである」「活動を行うことによって、平等な社会をつくりだせる」「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う」は平均点である3.5点付近となっている。

この結果を項目群ごとに見ていくと、活動の中での自己の能力を発揮できるかというソーシャル・スキルの項目群については、「興味・能力にあった活動を見つけ、役立つことができ、リーダーとうまくやることができる、がんばっている人を手助けできるが、自分の問題を解決することはあまりできない」というイメージで捉えられている。受講生は「自己の活動イメージは想像できるが、その活動は自分の問題解決にあまり役立たない」と考えているのではなかろうか。かつて金子郁容(1992)が、ボランティアを「楽しい」「自己実現」ととらえたように、ボランティア活動には「他人のため」だけでなく「自分のため」という目的もあるが、受講生には「自分のため」という意識はあまりみられない。

また、ボランティア活動イメージは「地域社会をよくすることができるが、社会はあまり変わらず、平等な社会の実現は難しい」というイメージでとらえている。受講生はボランティア活動によって「身近な地域社会は変えることができるが、社会全体を変えることは難しい」と考えているのではなかろうか。かつて入江幸男(1999)は「社会参加」「社会変革」「公共性の主体」としてのボランティアを提唱したが、入江の言うボランティア活動のためには、身近な地域の問題と社会全体

の問題を結びつけることが課題となるであろう。

さらに、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う」という今後のボランティア活動参加への可能性の項目は、3 調査を通じて平均点である 3.5 点付近となり、ボランティア活動に参加する意欲は教科「奉仕」の受講を通じては高まらなかったと考えられる。

この結果をより詳しく見ていくと、事前調査、事後①調査の変化としては「活動の中でちゃんと役立つことができる」(事前調査 4.48, 事後①調査 4.61 以下同様)「興味や能力にあった活動を見つけることができる」(4.36→4.43)「正しい社会の実現に役立つことができる」(4.22→4.29) など自発的な活動の中で自分がどうすればいいのかについての項目で肯定的回答が多くなっている。そして受講生個人としてはその活動を通じて「地域社会をよくすることができる」(4.35→4.42) ととらえていることがわかる。

一方、「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」(3.79→3.65)「活動を行っても社会はそのままである」(3.70→3.86)「平等な社会をつくりだすことができる」(3.65→3.47) では否定的回答が多くなる。自発的活動の目的はすぐに達成されるものではなく長い期間が必要とされることもある。受講生が教科「奉仕」受講を通じ、自己の問題や社会の問題は容易に解決できるものではないと理解したとするならば、この点も教科「奉仕」の学びと言えるであろう。

さらに教科「奉仕」受講一年後の事後②調査との比較では、「活動の中でちゃんと役立つことができる」(4.48→4.61→4.77)「自分の興味関心にあった活動を見つけることができる」(4.36→4.43→4.58) では事後①調査と比べても肯定的回答が多くなっている。また「活動に加わることで、頑張っている人を手助けすることができる」(4.51→4.59→4.77) も肯定的意見が多くなる。

加えて、事前調査と事後②調査との平均の差の検定では、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「活動に加わることで、がんばっている人を手助けすることができる」が 1% 水準で有意、「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」が 5% 水準で有意である。このように事前調査、事後①調査、事後②調査と経るごとに回答が変化する質問項目がある一方で、事後①調査と事後②調査で変化のない項目も多い。変化のあった項目はボランティア活動の中での自己の能力を発揮できるかというソーシャル・スキルの項目群である。他方、変化がわずかな項目は社会全体の変化を伴う項目である。先に述べたように受講生が実際の活動に触れ社会の構成要素や仕組みを理解することで、容易には社会は変化しないことを学んだのではないかと述べたが、教科「奉仕」受講以降の学びの中で、与えられた状況の中で活動できる能力だけではなく、社会の主体として積極的に活動できる能力も伸ばす必要があるのではないかと考えられる。

3.2. ボランティア活動イメージの決定要因

前述のボランティア活動イメージは受講生のこれまでの活動や教科「奉仕」での体験内容、事前学習や事後学習とどのような関係にあるのであろうか。以下では、小学校・中学校のボランティア活動経験と事前調査の関係、実際の活動先や事前学習・事後学習と事後①調査の関係、教科「奉仕」後のボランティア活動と事後②調査の関係から、ボランティア活動イメージに関与する体験について見ていきたい。

3.2.1. 小・中学校のボランティア活動経験

小学生時にボランティア活動経験がある人は 94 名 (52.8%) で約半数の人が「活動経験がある」

表2 小学校時のボランティア経験（複数回答）

	N	%
地域での活動	40	22.5
体育・スポーツ活動	3	1.7
文化芸術活動	2	1.1
イベントの手伝い	7	3.9
自然・環境保護に関する活動	61	34.3
国際交流・協力に関する活動	11	6.2
社会福祉に関する活動	22	12.4
保健・医療・衛生に関する活動	6	3.4
災害救援活動	20	11.2

表3 中学校時のボランティア経験（複数回答）

	N	%
地域での活動	29	16.8
体育・スポーツ活動	6	3.5
文化芸術活動	3	1.7
イベントの手伝い	14	8.1
自然・環境保護に関する活動	39	22.5
国際交流・協力に関する活動	13	7.5
社会福祉に関する活動	17	9.8
保健・医療・衛生に関する活動	3	1.7
災害救援活動	6	3.5

と回答している。その内容は「自然・環境保護に関する活動」が61名（34.3%）、次いで「地域での活動」が40名（22.5%）、「社会福祉に関する活動」22名（12.4%）である（表2）。

同じく、中学生時にボランティア活動経験がある人は79名（43.9%）で小学生より活動経験がある人が少なくなっている。その内容は「自然・環境保護に関する活動」が39名（22.5%）、次いで「地域での活動」が29名（16.8%）、「社会福祉に関する活動」17名（9.8%）である（表3）。

小学校時と中学校時のボランティア活動体験をクロスさせてみたところ、小学校・中学校ともボランティア活動の経験がある人が55名（61.1%）、経験がない人が58名（69.9%）であり、1%水準で有意差があった。

3.2.2. ボランティア活動イメージとの関連性

それでは小・中学校のボランティア活動経験は教科「奉仕」での奉仕体験活動前のボランティア活動イメージにどのように関連しているのであろうか。

小学校のボランティア活動経験によるボランティア活動イメージの平均の差の検定では、1%水準で有意となったのは、「自ら進んでボランティア活動をしなと思う」「がんばっている人を手助けできる」であり、5%水準で有意となったのは「リーダーとうまくやっていくことができる」「平等な社会を作り出すことができる」である。実際の平均値から見ると小学校でのボランティア活動経験がある受講生の方がより「リーダーとうまくやっていくことができ、がんばっている人を手助けできる」と回答しており、活動によって「平等な社会を作り出せる」と回答している。これは活動を通じた様々な経験の結果であると考えられる。さらにボランティア活動の成果を実際に感じ取ることで「自ら進んでボランティア活動をしたい」という肯定的意見が増加すると考えられる。

次に、中学校のボランティア活動経験によるボランティア活動イメージの平均の差の検定では、1%水準で有意となったのは、「自ら進んでボランティア活動をしなと思う」であり、5%水準で有意となったのは「活動の中でちゃんと役立つことができる」「活動を行っても、社会はそのままである」「活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる」である。実際の平均値から見ると中学校でのボランティア活動経験がある受講生の方がより「活動の中でちゃんと役立つことができ、活動によって社会を変え、正しい社会の実現に役立つことができる」と回答している。こうしたボランティア活動に対する肯定的なイメージからボランティア活動経験のある人の方が「今後も進んでボランティア活動を行う」と回答している。小学校での経験と同様にボランティア活動の成果が「自ら進んでボランティア活動をしたい」という肯定的意見となって表れてきている。

表4 事前学習はどのような内容でしたか。

	N	%
先生の授業を聞く	44	25.6
活動先の人のお話を聞く	109	63.4
活動先のことを個人で調べる	10	5.8
活動先のことグループで調べる	7	4.1
活動先のことをグループで発表する	2	1.2
計	172	100
無回答	22	
合計	194	

表5 事前学習で、活動先のことを十分に理解できましたか。

	N	%
理解できた	56	31.3
どちらかといえば理解できた	103	57.5
どちらかといえば理解できなかった	17	9.5
理解できなかった	3	1.7
計	179	100
無回答	15	
合計	194	

表6 事後学習はどのような内容でしたか。

	N	%
先生の授業を聞く	2	1.1
活動先の人のお話を聞く	4	2.2
活動先のことを個人で調べる	27	15
活動先のことグループで調べる	70	38.9
活動先のことを個人で発表する	2	1.1
活動先のことをグループで発表する	75	41.7
合計	180	100
無回答	14	
合計	194	

表7 事後学習では、活動したことを十分にふりかえることができましたか。

	N	%
よくできた	56	31.8
かなりできた	107	60.8
あまりできなかった	10	5.7
ほとんどできなかった	3	1.7
合計	176	100
無回答	18	
合計	194	

表8 奉仕体験活動内容（複数回答）

	N	%
地域での活動	82	42.3
体育・スポーツ活動	38	19.6
文化芸術活動	7	3.6
イベントの手伝い	33	17.0
自然・環境保護に関する活動	41	21.1
国際交流・協力に関する活動	4	2.1
社会福祉に関する活動	67	34.5
保健・医療・衛生に関する活動	2	1.0
災害救援活動	5	2.8

まとめると、小・中学校のボランティア活動経験はボランティア活動イメージに影響を与えており、経験者は活動での行動の仕方を理解し、ボランティア活動が社会を変えると意識していると言えるであろう。

3.2.3. 事前学習・事後学習・活動先について

教科「奉仕」の学習は、事前学習、奉仕体験活動、事後学習のプロセスがある。本調査では活動先と事前学習と事後学習の学びにつ

いて、事後学習終了後の調査（事後①調査）を行った。

事前学習において受講生が中心とした学習は、「活動先の人のお話を聞く」109名（63.4%）、「先生の授業を聞く」44名（25.6%）の2項目で全体の8割弱となっている（表4）。また事前学習によって活動先のこと理解できたのかについては、159名（88.8%）と9割弱の人が理解できたと答えている（表5）。以上から概ね事前学習については学習効果があったと考えられる。

事後学習において受講生が中心とした学習は「活動先のことをグループで発表する」75名（41.7%）、「活動先のことをグループで調べる」70名（38.9%）であった。実際にはこの両者が一連のこととして受講生には捉えられているであろう（表6）。こうした事前学習によって活動したことを十分ふりかえることができたのかについては、163名（92.6%）と9割強の受講生がふりかえることができたとしており、グループによる調べ学習と発表の組み合わせは有効な学習効果を生んでいると考えられる（表7）⁴⁾。

奉仕体験活動の活動内容については（表8）、「地域での活動」82名（42.3%）「社会福祉に関する活動」67名（34.5%）「自然・環境保護に関する活動」41名（21.1%）の順となっている。小・

中学校でのボランティア経験と比較すると、「地域での活動」や「社会福祉に関する活動」が多くなっていること、特に「体育・スポーツ活動」や「イベントの手伝い」といった小・中学校時にはほとんど見られない活動が多くなっていることが特徴としてあげられる。これは C 高校の奉仕体験活動が部活動単位を主としているため、スポーツ系部活動と連動した子どもたちへの指導、自分たちが出場しない競技大会や演奏会というイベントの手伝いが活動として行われていることによる。

3.2.4. ボランティア活動イメージとの関連性

それでは事前学習・事後学習や活動内容は教科「奉仕」受講後のボランティア活動イメージにどのように関連しているのだろうか。

事前学習とボランティア活動イメージの相関（ノンパラメトリック検定）では、「活動を行っても社会はそのままである」「活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる」「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う」以外の項目についてすべて相関があった。また事後学習との相関ではすべての項目において 1% 水準で有意となり、事前学習後におけるボランティア活動イメージと比較して、より強い相関となっている（表 9）。このことから事前学習・事後学習によってボランティア活動イメージはより向上すると言えよう。

他方、活動内容とボランティア活動イメージとの平均の差の検定を行ったところ、5% 水準においてどのイメージも有意な差は見られなかった。したがって、活動内容よりも、どのような事前学習・事後学習を行うかということがボランティア活動イメージの向上には重要であると言えるであろう。加えて、都立高校の教科「奉仕」は必修科目となっていることから、これまでボランティア活動を行ったことがない、またボランティア活動に対してあまり良いイメージを持っていなかった受講生であっても事前学習・事後学習を効果的に行うことで、すべての受講生のボランティア活動イメージが向上すると言えるのではなかろうか。

まとめると、教科「奉仕」受講以前のボランティア活動の有無は教科「奉仕」を受講する前にはボランティア活動イメージに影響があったが、教科「奉仕」の受講を通じ、活動の事前学習・事後学習を行うことによって、過去のボランティア経験の有無にかかわらず、受講生はボランティア活動イメージを向上させると言えるであろう。それはボランティア活動が社会を変えるというイメー

表 9 事前学習・事後学習とボランティア活動イメージの関係（Spearman のロー）

	事前学習で、 活動先のことを十分に 理解できましたか。	事後学習では、活動した ことを十分にふりかえる ことができましたか。
活動の中でちゃんと役立つことができる	0.171**	0.425**
自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる	0.222**	0.392**
活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる	0.157**	0.353**
活動を通じて、地域社会をよくすることができる	0.134*	0.318**
活動を行っても、社会はそのままである	-0.030	-0.207**
活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる	0.104	0.353**
活動を行うことによって、平等な社会をつくりだせる	0.184**	0.275**
活動を通じて、自分の問題を解決することができる	0.119*	0.272**
活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる	0.128*	0.336**
今後自ら進んでは、ボランティア活動をしないと思う	-0.074	-0.234**

**相関係数は 1% 水準で有意（片側） *相関係数は 1% 水準で有意（両側）

表 10 二年生のボランティア活動内容（複数回答）

	N	%
地域での活動	15	8.0
体育・スポーツ活動	20	10.7
文化芸術活動	3	1.6
イベントの手伝い	15	8.0
自然・環境保護に関する活動	26	13.9
国際交流・協力に関する活動	12	6.4
社会福祉に関する活動	5	2.7
保健・医療・衛生に関する活動	1	0.5
災害救援活動	7	3.7

表 11 二年生のボランティア活動形態（複数回答）

	N	%
授業の一環	5	2.7
課外活動 （ボランティアサークル以外）	66	35.3
学校のボランティアサークル	1	0.5
友人・仲間どうしのグループ	2	1.0
一人で	10	5.3
こども会、町内会・自治会の活動	2	1.0
その他	1	0.5

ジを推進するとともに、ボランティア活動などの自発的な活動の中での自分の立場を理解できるという意味で、受講生が「新しい公共」の担い手として活躍することができる可能性を秘めていると言えよう。

3.2.5. 教科「奉仕」受講後のボランティア活動

本調査では教科「奉仕」受講終了から約1年後に同一の質問紙を使用してボランティア活動イメージの調査を行っている（事後②調査）。このボランティア活動イメージに対する影響を検討するために、教科「奉仕」受講後の二年生時にボランティア活動を行ったかどうか、その活動内容や活動形態について質問を行った。受講生のうち二年生でボランティア活動を行った人は77名（41.2%）であり、受講生の約4割の人がボランティア活動を行っている。その活動内容をみると（表10）、奉仕体験活動内容に比べて、「自然・環境保護に関する活動」が増加し、「社会福祉に関する活動」「地域での活動」が減少している。また奉仕体験活動以前と比較して「体育・スポーツ活動」や「イベントの手伝い」が多くなっている。これは二年生のボランティア活動の形態がボランティアサークル以外の課外活動が多く、C高校が部活動と連携して奉仕体験活動を行っているために（表11）、二年生以降も当該部活動のボランティア活動を継続していると解釈できる⁵⁾。

3.2.6. ボランティア活動イメージとの関連性

それでは、教科「奉仕」受講後のボランティア活動は、ボランティア活動イメージにどのような影響を与えているのであろうか。受講後にボランティア活動を行ったかどうか、そのボランティア活動内容、そのボランティア活動形態とボランティア活動イメージとの平均の差の検定を行ったところ、いずれも有意な差がある項目はなかった。C高校の教科「奉仕」受講後のボランティア活動は部活動と連携して行われていることが多いが、部活動連携を含め、二年生のボランティア活動はボランティア活動イメージにほとんど影響を与えていないと考えられる。

3.3. まとめ

C高校の教科「奉仕」受講生のボランティア活動イメージは、活動の中での自己の能力の発揮というソーシャル・スキルにおいては「自己の活動イメージは想像できるが、活動が自分の問題解決に役立たない」と考え、ボランティア活動イメージについては「身近な地域社会は変えることができるが、社会全体をよくすることは難しい」と捉えており、こうした傾向は教科「奉仕」受講前と受講後で概ね増幅される。そのことから教科「奉仕」の受講は受講生のこれまでのボランティア活動イメージの定着に効果があったと言えるであろう。しかし教科「奉仕」の経験はボランティア活

動への意欲には結びつかないという結果となった（以上、3.1.）。既に行った教員に対するインタビューでは、社会の一員として活動できることが教科「奉仕」の学びであるとまとめたが（大東2010）、受講生自身もボランティア活動を社会変革の醸成やソーシャル・スキルの向上に結びつけて考えていることが推測される。

次に、教科「奉仕」受講とボランティア活動イメージの関連性について分析を行った。教科「奉仕」受講前のボランティア活動はボランティア活動イメージに多様な影響がある（以上、3.2.2）。しかし教科「奉仕」受講後のボランティア活動イメージは、実際の活動内容ではなく、教科「奉仕」の奉仕体験活動に伴う、事前学習と事後学習の理解度によってボランティア活動イメージが向上するという結果となった（以上3.2.4.）。我々の研究においても、サービス・ラーニングにおけるふりかえり（リフレクション）の重要性が再三指摘されていることをまとめた（富川ほか2008）。今回の調査によって、全学必修のサービス・ラーニングにおいても、事後学習でのふりかえりを行うことが、受講生の理解を定着させ、ボランティア活動イメージの向上につながることを指摘したい。加えて、我々は以前大学生対象に行ったアンケート調査から「自発的でない活動はその後の自発的な活動に結び付きにくい」と指摘したが（柴田ほか2004、古川ほか2004、大東ほか2004）、教科「奉仕」という必修課目によって「課せられた」活動は、事前学習・事後学習を行うことで、その後のボランティア活動につながる可能性があると考えられる。

さらには、教科「奉仕」受講後のボランティア活動経験はボランティア活動イメージに影響を与えることはないようである（以上、3.3.6）。事前調査と事後②調査では、団体内での自己の活動についての項目で肯定的な意見が多くなったが、それはその後ボランティア活動を行ったかどうかではなく、その他の要因、例えば他の正課での学びなどによってもたらされていると推測できる。

4. 要約と課題

この小論の目的は、ボランティア活動に対するイメージの変化についてサービス・ラーニングを受講した高校生に対する調査から分析し、ボランティア活動に参加する要因について考察することにある。東京都立C高校において、「奉仕」活動の事前と見込まれる2011年7月（事前調査）と、事後と見込まれる同年12月（事後①調査）及び、「奉仕」活動実施一年後の2013年2月（事後②調査）に、受講生に対するアンケート調査を行った結果、①C高校の教科「奉仕」は受講生のこれまでのボランティア活動イメージの向上に効果があったが、教科「奉仕」の経験はボランティア活動参加意欲に結びつかない。②教科「奉仕」受講前のボランティア活動はボランティア活動イメージに多様な影響があるが、教科「奉仕」受講後のボランティア活動イメージは、実際の活動内容ではなく、教科「奉仕」の奉仕体験活動に伴う、事前学習と事後学習の理解度によってボランティア活動イメージが向上する。③教科「奉仕」受講後のボランティア活動経験はボランティア活動イメージに影響を与えることはないようである。

ただ、今回の報告は、数ある東京都立高校の1事例にすぎない、今後は他の都立高校においても同様の結果がみられるのか、特に事前学習と事後学習の内容によって、ボランティア活動イメージがどう変化するかについて検討を行いたい。さらに、今回の報告は「ボランティア活動イメージ」についての分析であり、このイメージが実際の活動にどう結びついているのかについては、今後検討を行いたい。また、団体での立ち位置は受講生のソーシャル・スキルに関わることであり、

東京都教育委員会が教科「奉仕」において目標としたソーシャル・スキルとの関連性についても今後検討を行いたい。

注

- 1) 日本へのサービス・ラーニングの展開については、7つに分類し、また実践事例を見ることによって、課題として①学習の主体、サービスの提供側である「学生、大学」とサービスの受け手側である「地域住民、行政・福祉団体・NPO 団体などの外部セクター」との間で、サービス・ラーニングに対する共通理解が形成できていない点、②日本でのサービス・ラーニングには受け入れ側、つまり地域住民や外部セクターに対してサービスを提供するという意識がない、もしくは薄いという点の2点を指摘した（富川ほか 2008: 16）。
- 2) 東京都立高校のサービス・ラーニングの研究については、二宮匡樹ほか（2008）、宮崎猛（2011）などがある。
- 3) 1997 年の調査については大東（2002）を、2002 年の調査については湯川宗紀ほか（2003）を参照。
- 4) 我々のグループは先行して都立高校3校のデータによる総合的な分析も行っている（大東ほか 2012）。
- 5) 著者らは C 高校における課外活動と連携した奉仕体験活動について参与観察を行ったが、教科「奉仕」受講生以外に、当該課外活動メンバーである二年生も活動に参加している。

参考文献

- 古川秀夫・大東貢生・田中滋・福田菊，2004，「ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間の乖離」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』6：132-145.
- 入江幸男，1999，「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社，4-21.
- 金子郁容，1992，『ボランティア—もう一つの情報社会』岩波書店.
- 宮崎猛，2011，「社会奉仕体験活動の展開への示唆—米国サービス・ラーニングをめぐる議論に着目して」『創大教育研究』20：1-20.
- 二宮匡樹・飯田潤子・古屋茂樹・砂川博美・山田幸恵・村尾数馬・泉洋一・建部宗克，2008，「よりよい奉仕体験活動の研究と提案：都立高校必修教科「奉仕」へのプラン提案と協同実践を目指して（研究活動助成制度に基づく論文・発表・制作）」『創大教育研究』17：79-92.
- 大東貢生，2002，「当事者の考えるボランティア」古川秀夫編『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所：63-77.
- 大東貢生・柴田和子・湯川宗紀，2004，「ボランティア・イメージと活動経験の連関性」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』6：146-156.
- 大東貢生・富川拓・柴田和子・古川秀夫・山田一隆，2010，「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅲ—ボランティアやサービス・ラーニングによる他者理解に向けて—」『佛大社会学』34：46-52.
- 大東貢生・富川拓・山田一隆・古川秀夫・柴田和子，2012，「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅵ—教科「奉仕」受講生に対するアンケート調査から—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第18回いばらき大会報告要旨集』：118-119.
- Reeb, Roger N. and Katsuyama, Ronald M. and Sammon, Julie A. and Yoder, David S, 1998, "The Community Service Self-Efficacy Scale: Evidence of Reliability, Construct Validity, and Pragmatic Utility," *Michigan Journal of Community Service Learning*, 5: 48-57.
- 柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫，2004，「ボランティア活動の動機における自発性と外発性」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』6：119-131.
- 立石宏昭，2005，「ボランティア学習」岡本栄一・森本友美・河内昌彦・立石宏昭編『ボランティアのすすめ』ミネルヴァ書房：64-88.
- 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課，2006，『「奉仕」カリキュラム開発委員会報告書～奉仕体験活動の必修化に向けて～』東京都教育委員会.
- 富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫，2008，「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」『佛大社会学』32：9-18.
- 富川拓・大山治彦・柴田和子・古川秀夫・大東貢生，2009，「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅰ

～東京都立高校における必修科目「奉仕」の創設について～』『佛大社会学』33：41-46.

山田明, 2008, 『サービス・ラーニング研究：高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備』学術出版会.

湯川宗紀・柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫, 2003, 「『学生のボランティア活動に関する意識調査』中間報告」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』5：191-210.

付記

この研究は平成 24 年度龍谷大学国際文化研究所研究プロジェクト助成の成果, および, 平成 22～24 年度科学研究費助成事業「中等教育におけるサービス・ラーニングの影響に関する研究」(基盤研究 (c), 課題番号: 22530584, 研究代表者: 大東貢生) の成果の一部である。